

企画
特集



FURUGORI

SDGs

1st YEAR

古郡建設

SDGs

始動

地域密着 持続可能なまちづくりを

2030年までに世界が取り組むSDGs（持続可能な開発目標）の支援・達成に向け、地域建設業者が存在感を見せ始めている。深谷市に本社を置く古郡建設（古郡栄一社長）は、2021年を「FURUGORI SDGs 1st YEAR」の節目に決め、行動を開始した。地域密着の建設会社を考えるSDGsのレゾナンスは何か。古郡社長と新たなプロジェクトを担うスタッフらに、その詳細を取材した。

閉塞感バネに
思いを結集

古郡建設として、SDGsのレゾナンスを掲げる構想はかねてからあった。重なるさまざまなタイミングをみた結果、2021年こそ本格始動の好機」と判断。持続可能なより良い世界をつくる国際目標の期限（2030年）まで残の10年となり、その初年である今年を「FURUGORI SDGs 1st YEAR」に位置付けたのは、確かな理念と決意の表れでもある。

この時期に古郡建設を突き動かした、もう一つの要因がコロナ禍。感染症の拡大をはじめ、世界を取り巻く問題の多くが少なからず文明社会の影響によるものである以上、その課題と向き合うことは、必然的にSDGsを意識することへとつながるからだ。

古郡建設のコーポレートローガンは「突き抜ける」。社会が閉塞感に覆われるのであれば、なおさら新しい分野を追求し、果敢にチャレンジしていく社風がある。一方、長引く経済社会活動の制限・停滞を受け、それぞれが自己の内面と向き合ったり、世の中の在り方について考えさせられたりする時間は増えている。今、自分たちが生きる時代はこの先どうなるのか。新

型ウイルスの実態ですら今だ確かではなく、不安がつきま



ち、多くの建設会社が目まぐるしく、過剰しやすい社会を築く上での礎になる。そんな意図を込めたメッセージが発信された。

SDGsを支える理念は世界平和、人種差別根絶、環境保護など幅が広い。その場にいるスタッフの間に「自分たちで務まるか」といった懸念が走ったのは確かだ。しかし、予想どおりの反応でもある。当初から、無理に大風呂敷を広げる考えは持っていない。全規模の大企業と異なり、地域に密着した企業の大

半はニッチな分野の中での最先端を目指している。「むしろそうすべきでもあるし、それを実現するのが地場企業の強みだ」（古郡社長）。だからこそ、社員らは自信を持って、一致団結してもらえよう。一つ一致団結したから確実に取り組む方針を強調した。ファーストイヤーでは、まずSDGsとすでにリンクしている部分にスポットを当て、「一点集中」のような形でアクションを起こしていく。

一つ一つの成果は小さくとも、SDGsのすそ野を広げるという観点で見れば、その意義は表面的な結果以上の大きさを持つ。地場企業ならではの共感を呼ぶレゾナンスの骨格が決まった。

常識を
リソースに
SDGsの17のゴールのうち



SDGsで新たなビジョンを打ち出した古郡社長。地域とともに息の長い成長を志す



研修を終え理解と「ミニレクチャー」が深まり、マスコクの下も自然と笑顔に

変え、捉え直してみようとも必要だ。

例えば、ごみの分別処分。当たり前のルールかもしれないが、抱える建設現場の数や規模などによつては、ほろびが生まれかねない。継続は立派な成果といえる。ほかに、住宅建築における自然素材活用やリフォーム・リノベーション、ソーラー発電、ICT施工など、古郡建設が展開してきた多くの事業・取り組みが実はSDGsに結び付く。

「価値はすぐそこにある」。そう考えると、SDGsファーストイヤーのスタートには、当たり前や常識の一つに過ぎなかったものが新たなリソース（資産）へと変化する契機であるとの期待も持てる。従業員に与える負荷を考

え、SDGsが目指すゴール自体は、ある程度絞るつもりではいるが、自社のプロジェクトを改めて見直し、そのなりの広さを再確認できている。

逃すな、千載
一遇の好機

「持続可能な企業活動への感度は若い世代は高い」。

若者たちとの最近の交流を通じて、古郡社長が得ている実感だ。店頭と同じ種類の商品が複数並んでいたら、多少価格が張っても、よりサステナブルな製品開発に力を入れるエネルギーを邁進マインドは着実に根を張っている。就職活動をも、SDGsに共鳴する企業とそうでない企業が比較されれば、学生に選ばれるのはどちらか。

若者のサステナブルな活動への関心は、日々の生活と社会のつながりに対する意識が強く投影された結果でもある。将来の担い手不足が課題の建設業界にあって、働く意義を感じてもらえる企業であるためにSDGsは無視できない経営の指針だ。

くしくも、明治期からの実業家深谷市出身の渋沢栄一が次の1万円札（24年度発行予定）の肖像に決まり、深谷がメディアに取り上げられる機会は増えた。渋沢が主役の大河ドラマも放映され、今までになく注目を集める魅力発信が始まっている。そこへ、今回のSDGsファーストイヤーも重なり、21年は古郡建設にとって千載一遇のチャンスの年となった。

一歩二歩、あるいは半歩でも先に進んだ企業へー。

国際目標の2030年まで長丁場となる道のりを、少しずつでも、全従業員とともに理解を深めながら歩んでいく。一人一人の考え方を組織の原動力・歯車に、古郡建設は動き出した。

デザインマネジメント

DM部のノウハウで取り組み盛り上げ



DM部を動かす渡辺（中央）、関矢（左）、福島（右）の3氏。社長も認める絶妙なバランス感が組織に相乗効果を生む

SDGsファーストイヤーの推進部隊となるのが、社内各部署のスタッフらで構成するプランニングチームと、社長直轄部門のデザインマネジメント（DM）部。両者はこれまで、新たな発案をプランニングチームが引き受けるという役割分担で、特に自社のプランニング・プロモーション活動をメインに協働してきた。その体制・ノウハウをSDGsの分野で存分に生かしていく。

評価されるアクション起こす

目、2019年まで土木工事に従事してきた渡辺昭昭さんだ。「他社と比べてどう違うかは、古郡建設ができること、やるべきことを追求する。目先のスピードや実績を追い方は、一線を画し、一年一年、確実に変わっていったと評価してもらえらるアクションを起こす」。

SDGsとは

課題解決へ向けた
17目標と169の行動

▷SDGs（Sustainable Development Goals）＝2015年9月に国連が採択した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に基づく2030年までの指針。貧困・不平等・気候変動・平和など世界が直面する課題の解決に向けた17の目標（ゴール）と、対応する169の行動（ターゲット）を掲げる。それぞれのゴールを象徴するアイコンもつくられている。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



春から現場キャラバン

SDGsファーストイヤーで、その先行プロジェクトとなるのがサインマネジメント（DM部）が旗振り役として展開する現場巡回「SDGsキャラバン」。

4月以降から年末まで、建設事務所を構える稼働中現場などをDM部メンバーが随時巡回し、SDGsに関する取り組み状況をチェック・判定するアクションプランとなる。協力会社も巻き込み、SDGsに対する理解浸透と建設業のイメージアップにつなげる狙いだ。

SDGsファーストイヤー行程案				
	1月	2月	3月	4月～
SDGs研修		→		→
県SDGs関係登録		→		→
社内説明会		→		→
HP公開			→	→
キャラバン			→	→

先行プロジェクト DM部が旗振り役

協力会社も巻き込み理解浸透へ



切なアドバイスができるよう、DM部メンバーが研ぎに研ぎに励んだ上で臨む。その一環として取り組むのが、「2030SDGsカードゲーム」に関する公認ファシリテーターによる研修を巡回時には、その場で適

だ。カードゲームは、一見すると複雑なSDGsのルールやプロセスを感覚的に学習・体験するための公認ツール。ファシリテーターを招いた研修会はこのゲームで実際に盛り上がり、今後も積極的な活用する考えを固めたという。カードなどを用いた研修（3時間程度）は、入社歴や世代ごとにグループ分けして随時実施。世代間ギャップが研修の支障とならないようにするための配慮だ。DM部の渡辺さんは「建設現場では協力会社の理解浸透も不可欠であることから、キャラバンを通じて時代に輪を広げていきたい」と意欲を示す。

2030SDGsカードゲームを体感する古郡スタッフら。各員は要注目だ。

キャラバン開始の4月に向け、県が運営する「SDGs官民連携プラットフォーム」環境SDGs取組宣伝企業（「SDGsパートナー」）の各制度は入会・登録済み。その準備が整った段階で、SDGs関連のコンテンツをコーポレートサイトに公開し、キャラバンの実施状況などを随時更新・情報発信していくプランだ。「最初の仕組みさえ固まれば、スタッフも迷わず次々に進みやすくなる」と古郡社長。SDGsの追求は、機械的価値の提供だけでは他社との差別化が難しくなってきた時代の活路という意味合いもある。確かな機能的価値に、感情を揺さぶるような別の価値を上乗せできれば新たな可能性がみえてくる。古郡建設の今後の展開は要注目だ。